

【一】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。（ただし、設問の都合上一部本文を変えた所があります。）

「おれんちまで一緒に帰ろう」

「だって、哲夫くんち海の方でしょ。すごく遠いんですよ」

「でも、おれの力になりたいんだろ。友達いなくて可哀想なおれの話し相手になろうとしてるんだろ。それとも、おれが片目だからって珍しがってついてくるだけなのかい？」

「……いいわ。行こ。哲夫くんちまで歩こう！」

私はやけになって、どんどん歩き始めました。こんなに人の思いやりを受けることを知らない人っていないわ。私は、口惜しさに涙ぐみそうになりました。それまで、どんな教室の嫌われ者でも、私に気を許していたのに。そして、そのことにより、私は、すべての人の尊敬と信頼を得てきたというのに。

哲夫くんが、私の後ろをついてくる気配がないので、振り返ると、彼は、ずっと後ろの方で、とんぼをつかまえようとしていました。私は溜息をついて、引き返しました。

「急ごうよ。哲夫くんち、遠いんだからさ」

「ほら、しおからとんぼだ」

「知ってるわよ」

「どうしてしおからとんぼって言うか知ってるか？」

「ううん」

「尻っぽが塩辛いからなんだ」

その瞬間、私は口もきけないくらいに驚きました。なんと、哲夫くんは、そのとんぼの尻っぽを、ぱくりと口に入れたのです。とんぼは、あきらめているのか、心地良いのか、少し羽を震わせただけで、じっとしていました。

「うめえ。おまえも味見してみる？」

私は驚いて首を横に振りました。食べてしまうのだろうか。私は恐れおののいて、彼が閉じた唇にとんぼの尻っぽをはさんでいる

のを見詰めていました。彼は、そのまま、私をじっと見返しました。午後の陽ざしが逆光になり彼と、とんぼを照らしていました。私は、彼の片方の目が本物でないことを、今さらのように思いました。陽ざしを通した瞳は、確かにガラスのように美しかった。

私が呆然としている内に、彼は、とんぼの尻っぽを唇から抜き取り、草むらに逃がしました。とんぼは、少し、よろよろとしていましたが、すぐに元気を取り戻して飛び立っていきました。

「おれ、しょっぱいもんが好きなんだ。おまえは？」

「甘いもの」

哲夫くんは、私の答えを無視して、どんどん歩き始めました。私は慌てて、彼の後をついていきました。いくつもの温室を通り越し、私たちは田畑の間を歩き続けました。段々、夕方が近くなっているらしく、私たちの影は、長くなっていきました。この先に海なんてあるのだろうか、私は不思議に思いました。

「ねえ、海の側に住んでいるの？」

「違うよ。海は、おれんちよりも、ずっとずっと遠いよ。おれは、海の方に住んでるだけだよ」

「ふうん。でも、時々、服に砂を付けてるんでしょ」

「砂浜まで行って、遊んでることは、そりゃあるよ」

「遊ぶって？」

「蟻地獄を掘ったり、はまゆうの根っこを引っ張ったり、それとか、ぼうっとしてたりさ」

「ぼうっって？ 何を考えるの？」

「いろんなこと、話しても、おまえにはわかんねえ」

①「あのねえ、哲夫くん。あなたって素直じゃないよ。私は、あなたのそういうところを直してあげたいの。おとうさんとおかあさん、あなたが、そういう態度を取ったりしてもなんにも言わないわけ？」

「いねえもん」

「!? どうして!?」

「死んじゃったもん。おれ、おばあちゃんと住んでるんだもん」

私は、なんと言葉を返して良いのか解りませんでした。この世に、おとうさんとおかあさんのいない子供がいるとは想像もなかったことでした。私は、ただ黙って、うなだれていました。

「可哀想だろ」

「……………」

②「可哀想な人間に手出しをしない方がいいぜ。困ったことになるんだから」

「ごめん……」

「謝まなくなっちゃいいよ。おれ、自分では、可哀想なんて思ってたねえもん。学校のやつらと口をきかないのは、あいつらが、おれを可哀想だと思ひ始めるのが面倒なのさ。人を可哀想だと思ふのって気持ちいいだろ。冗談じゃねえや。おれ、そんなら嫌われてた方がいいや。あんな学校のやつらなんて、おれ、ターゲットにしてねえもん」

「ターゲットってなあに？」

「女には関係ねえよ。でも、おまえ、いいの？ あと二、三時間で日が暮れちゃうよ。そしたら、帰れなくなっちゃうよ。道、わかんないんだろ？」

言われて、私は、はっとしてあたりを見渡しました。稲刈りの終わった枯れた田んぼが、見渡す限り広がり、そして、そこに立っているのは、いつのまにか、私と哲夫くんだけになっていました。西日が、痛いくらいに私の瞳を刺していました。

「な？ 言ったろ？ 可哀想な人間に首つつ込まねえ方がいいって」

「どうしよう……………」

私は、急に心細くて泣きそうになりました。

③「なんだか芥川龍之介のトロッコみたいな気持ちになって来た」

「なんだ、それ？」

「行きはよいよい帰りはこわいっていうお話だよ」

「通じゃんせのことか」

哲夫くんは、笑いながら、私を見ました。私は、とても笑い返すことが出来ません。来た道など、すっかり忘れていました。私は、いつのまにか、しゃくり上げて涙を流していました。

「ははは、おれんち、まだまだ着かないよ。さあ、歩こうぜ」

私は絶望的な気持ちになり、その場にしゃがみ込んで、顔を覆って泣き始めました。哲夫くんは、そんな私を、しばらく見ていたようでしたが、突然、言いました。

「あ、おまえの足の下に蛇つぶれてら」

私は悲鳴を上げて飛びのきました。

「嘘だよ。今頃の季節に蛇がいるわけないじゃん。馬鹿だなあ、おまえ」

私は、口惜しさに唇を噛みしめ、涙をこしこしと拭きました。哲夫くんは、小さな川を飛び越えて、田んぼに、ぽんと降りました。「こっち来いよ」

私は、助走を付けて、必死に川を飛び越しました。そして、哲夫くんの後をついて、田んぼの中を歩いていきました。根許を残した稲は、さくさくと良い音を立てて、私たちの足に踏まれました。哲夫くんは、脱穀した稲を積み重ねた大きなわらの山のひとつに寄りかかって、地面に座りました。私も真似をして、彼の隣りに座りました。私は、もう哲夫くんなしでは、家に戻ることも出来ないのです。彼から離れることは出来ませんでした。

わらは西日のせいで、ふかふかと暖かく私たちを迎えてくれました。おかげで、私の不安も、少し薄れました。

「なーんか、いい気持、眠くなりそう」

「眠ったら、死ぬぞ!!」

「え!？」

「嘘だよ」

私は、がっくりと首を下に向けて、絶望のポーズを取りました。その時、哲夫くんの運動靴が目に入りました。靴ひもを通す所

に、砂が溜^たまっているのが解りました。

「ねえ、海で、ぼうっとして何を考えるの？」

「教えない」

「けちね」

「おまえねえ、自分だけ、そういうことを教えてもらえんと思ったら大間違いだよ。おまえみたいなやつこそ、ほんとに、誰^{だれ}からも、秘密を教えてもらえないんだ」

「どうして？」

「良い人のふりするの、一番、悪人なんだよ」

③「私が悪人だって言いたいなの？」

「まあな」

私は、なんだか、また悲しくなってきた、ひとしきり泣きました。哲夫くんは、少しも動じることなく、わらを引っこ抜いて、結んだり、齧^{かじ}ったりしていました。私は、いつまでたっても、彼が、私を慰^{なぐさ}めようとはしないので、あきれて、顔を覆っていた指を広げて、彼の顔を盗^{ぬす}み見ました。彼は、私のことなど気にも止めていないようでした。ぼうっと考えているんだ。私は、そう思い、納得しました。すると、西日で金色に染まっている田んぼが、なんだか夕方の海のような気がして来^きました。涙のせいかもしれませんが、あたりは、静かに漂^{ただよ}うさざ波で満ちてきたような、そんな気がして、私は、小さな声で叫^{きけ}びました。哲夫くんは我に帰ったように、私を見ました。

「どうした？」

「なんかねえ、私、海辺にいるような気になってたんだよ」

哲夫くんは、顔をくしゃくしゃにして笑いました。齒^はが、白いんだなあとは感じていました。

「な。やっぱ、そう思うだろ。海、ちゃんと見えるだろ」

「うん」

「おれの目、片方しかないけど、ちゃんと、何でも見えるんだ」

「うん」

私は、哲夫くんの横顔をこっそり見詰めて、綺麗^{きれい}だなあと思いました。見えていない方の瞳は夕陽を浴びて、きらきらと輝^{かがや}いていました。耳の後ろから、砂がこぼれたような気がしました。海の方の子なんだなあ。私は、つくづく、そう思いました。

「私、なんか、哲夫くんと結^{けっ}婚^{こん}するような気がするな」

「ええ!？」

私は、自分でも、何故^{なぜ}、そんなことを口に出したのか解りませんでした。ただ、⑤「こういう男の子が好きだなあと感じたのです。そうして、毎日、ふかふかのわらの山に寄りかかって、夕陽を浴びて、ぼうっとするのは、誰^{だれ}もが私を好きになること」に向かつて、努力することもないので、そんなことをしなくても、私のだんなさんは、気にしないのです。私は、この思いつき^bに有頂天になりました。

「ねえ、どう思う。結婚するのってさ」

「知らねえよ」

「なんで？」

「おれとなんて結婚出来ないよ」

「どうしてよ」

「海の方の子は苦勞が多いのさ」

「ふうん」

私は、少しがっかりした気持で、哲夫くんがするように、わらを引っこ抜きました。つまらない気持でいっぱいでした。

「帰ろう」

突然、哲夫くんは立ち上がりました。

「道、わかんないもん」

「解るとこまで、おれ、送ってくから」

私は没々、立ち上がり、哲夫くんに、わらを払ってもらいました。私は、そんな彼に笑いかけましたが、彼は怒ったような表情を浮かべたままでした。

「哲夫くん」

「なんだよ」

「もっと素直にならないと駄目だよ」

「うん」

哲夫くんと私は来た道を引き返し始めました。陽は落ちかけて、夕闇の訪れを告げていましたが、私は、もう少し心細くなりませんでした。可哀想な人に首をつつ込むのを止めたせいかもしれません。哲夫くんは、もう、私にとって可哀想な人ではなくなっていたのです。

年も暮れ、二学期も終わりに近付く頃、父は、私に、三学期は別な学校で過ごすことになるだろうと告げました。私は衝撃で口もきけませんでした。母は、父の栄転とやらをとて喜んで、私に伝えましたが、私は鼻白むばかりでした。私は、もう既に、この田舎町が大好きになっていたのです。

終業式の日先生が教室のお友だちにそのことを伝えました。誰もが驚き、そしてこらえ切れずに泣き出す人たちが続出しました。私のいつものやり方は、ここでも成功していたようです。皆、私のことを、本気で慕っていたのです。私は、教壇に立ち、泣いている彼らをなめました。すると、私の瞳からも涙が噴き出してきました。後から後から湧いて来る涙は、けれども、皆のためのものではありませんでした。私は、哲夫くんを見ていました。彼は、泣かずに唇を噛みしめて、私をにらんでいました。私は、大量の涙を拭うこともしなかったので、それは、だらだらと口の中に流れ込んでいきました。しよっぱいもんが好きなんだ。私は、憮然とした表情の彼の顔を見て、そんな言葉を思い出していました。

(山田詠美『海の方の子』)

② 芥川龍之介のトロッコ

「トロッコ」は小説の題名。八歳の少年が鉄道の建設現場で使われていたトロッコに興味をもち、作業員に頼んで一緒に線路の上を押させてもらって喜んでいたが、元の場所からだいぶ離れたところで、夕暮れが近いから一人で帰るように、と言われてしまう。

問一 —— 線部 a、c の語句の本文中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「やけになって」

ア くやしくなって

イ きらいになって

ウ どうでもよくなって

エ かわいそうになって

b 「有頂天になり」

ア 急にはずかしくなって顔を赤らめて

イ こんな相手はいやだとむしゃくしゃして

ウ あまりにも現実的でないのでがっかりして

エ いい思いつきだと喜んで夢中になって

c 「首をつつ込む」

ア 期待して何かを待つ

イ 物事に必要以上にかかわる

ウ 他人の要求を受け容れる

エ 相手の発言を疑問に思う

問二 —— 線部 A「私は、口惜しさに涙ぐみそうになりました」とありますが、この文章の中にはいくつか「涙」という言葉が出てきます。本文中の B から D の箇所の「涙」について、「私」がどのような気持ちで流したものか、最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア さみしさ

イ 不安

ウ 口惜しさ

エ 喜び

問三——線部①「あのねえ、哲夫くん。あなたって素直じゃないよ。」とありますが、このときの哲夫とは正反対の態度・セリフを、次にぬき出した本文の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私の答えを無視して、どんどん歩き始めました。
イ いろんなこと、話してもおまえにはわかんねえ
ウ 女には関係ねえよ。

エ 解るところまで、おれ、送ってくから

問四——線部②で、私は「ごめん……」と哲夫に謝りますが、なぜ謝ったのですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 哲夫に可哀想な思いをさせたから。

イ 哲夫を困らせてしまったから。

ウ 哲夫に嫌われたと思ったから。

エ 哲夫を傷つけたと思ったから。

問五——線部③「私が悪人だって言いたいのか?」「まあな」とありますが、ここでの哲夫の私への評価として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 泣いてばかりいるやつ

イ お人好しなやつ

ウ いい人ぶるやつ

エ 気まぐれなやつ

問六——線部④「私は、小さな声で叫びました」とありますが、どうして小さな声で叫んだのですか。その理由を本文の言葉を使いながら、解答欄に合うように四十字以内で答えなさい。

西日で金色に染まっている田んぼが、

四十字以内

から。

問七——線部⑤「こういう男の子が好きだなあと感じたのです」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私はいつも「誰もが私を好きになること」に向かって努力してきたが、哲夫がそのような努力をしなくてよく、夕陽を浴びて一緒にぼうつとできる自分と対等な相手であることに気づいたから。

イ 私はいつも「誰もが私を好きになること」に向かって努力してきたが、哲夫がそのような努力をしなくてよく、わらの山をふかふかにしてくれるくらい手際のいい男の子であることに気づいたから。

ウ 私はいつも「誰もが私を好きになること」に向かって努力してきたが、哲夫がそのような努力をしなくてよく、田んぼを海に変えてしまうくらい美しい男の子であることに気づいたから。

エ 私はいつも「誰もが私を好きになること」に向かって努力してきたが、哲夫がそのような努力をしなくてよく、だんなさんになったら自分はきちんとしていなくてよいことに気づいたから。

問八——線部⑥「私は、もう少し心細くなりませんでした」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「素直になる」と哲夫に言わせて勝ち誇ったように思えたから。

イ 好きな哲夫といっしょに家の近所まで帰れることになったから。

ウ 可哀想な哲夫の話し相手になることができてうれしかったから。

エ 渋々立ち上がった自分の服に付いたわらをはらってくれたから。

問九——線部⑦「しょっぱいもん」とは何を表現していますか。最も適切な組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 海水・とんぼの尻っぽ・涙・別れの寂しさ

イ 田んぼ・とんぼの尻っぽ・蟻地獄・別れのあわただしさ

ウ 帰り道・とんぼの尻っぽ・信頼・別れの口惜しさ

エ 西日・とんぼの尻っぽ・失望・別れの心細さ

【二】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、設問の都合上一部本文を変えた所があります。)

植物たちは、夜の長さを正確にはかってツボミをつくります。「なぜ、暗黒の長さをはかるのが、そんなに正確なのか」と問われれば、「正確な時計をもっているから」と答えることができます。しかし、「どんな時計ですか」とか、「その時計は、どんなしくみですか」などの質問には答えることができません。植物がもっている時計のショウタイ^aが、まだ解明されていないからです。

しかし、「なぜ、植物はそんなに正確に、夜の長さをはからなければならないのですか」という疑問には答えることができます。夜の長さをはかってツボミをつくるのが早すぎても遅すぎても、植物はすごい不利益をこうむったり、ひどい場合には絶滅^{ぜつめつ}してしまったりするからです。

① アサガオを例に考えましょう。まず、ツボミをつくるのが早すぎる場合です。アサガオの発芽したばかりのふた葉の葉っぱには、夜の暗黒を感じ、その長さをはかるノウリヨク^bがすでにあります。だから、発芽したばかりのふた葉の葉っぱに十分に長い夜の暗黒を与えると、小さい芽生えのうちに、ツボミをつくらせることができます。

こうしてツボミをつくらせると、芽生えのもっとも先端^{せんたん}にある芽がツボミになります。この芽は、ツボミにならなければ、次々と葉をつくり、芽を伸ばしていきます。②ところが、芽がツボミになると、その後はもうツルは伸びませんから、小さい植物のままです。そのような小さな植物が花を咲かせたら、花の数はわずかですから、少しの個数のタネしか残せません。

大きくなってから花を咲かせる方が、多くの花を咲かせることができ、多くのタネをつくれます。だから、多くの子どもを残せません。正確に夜の長さをはかるのは、夜の長さが短いうちに、すなわち、あまり早くに、ツボミをつくらないようにしているのです。

だからといって、アサガオが、「大きくなってから花咲く方が、多くの花を咲かせ、多くのタネをつくれるから」と、夜が長くなっているのにいつまでもツボミをつくらずに成長を続けていると、冬が近づいてきてしまいます。すると、寒くなってしまい、ツボミをつくれなくなり、タネを残せません。あるいは、ツボミをつくっても、花を咲かせなくなり、タネをつくれなくなります。あるいは、花は咲いたけれども寒くなってタネはつくられないということになります。

夏遅くから秋にかけて花を咲かせる植物にとっては、タネは冬の寒さを過^すぐすために必要なものですから、タネができなければ、この植物は冬を越^こせません。だから、子どもを残せず、絶滅してしまいます。

③ また、春に花を咲かせる植物でも同じように考えられます。春に花咲く植物は、冬至の日を過ぎて夜が短くなってくると、短くなってきた夜の長さを感じて、ツボミをつくります。でも、あまりに早くに花を咲かせると、からだ十分に成長していないので、多くのタネを残せません。

よく成長してから花咲く方が、多くの花を咲かせ、多くのタネをつくれます。だからといって、夜が短くなっているのにいつまでもツボミをつくらないと、夏が来てしまいます。春に花を咲かせる植物は夏の暑さに弱いのですから、夏が来てしまうと、夏の暑さのために枯^かれてしまいます。そのケツカ、子孫を残せません。だから、絶滅してしまいます。

④ ナノハナは、三月ごろに、少し暖かくなりはじめると、一日に約一〇センチメートルも背丈^{せたい}を伸ばします。この植物が背丈を伸ばすのは、伸びた茎^{くき}の先端に花を咲かせるためです。「なぜ、そんなに急いでいるのか」と不思議に思えるほど、春の初めにグングン背丈を伸ばし、その先端に花を咲かせます。

冬の寒さの中で育ってきたナノハナは、初夏の暑さに耐^たえられない性質なので、暑くなるまでに花を咲かせ、タネをつくらうとしているのです。グングン背丈を伸ばすのは、その先端に花を咲かせ、目立ち、虫に「ここに花が咲いているよ」とアピールできるからです。

自然の中で、多くのタネをつけようとして、植物がいつまでも自分のからだを大きくしていたら、秋に花を咲かせる植物なら、寒い冬が来てしまいます。春に花を咲かせる植物なら、暑い夏が来てしまいます。だから、花を咲かすことができず、タネを残せません。

⑤ タネが残せなければ、その植物は絶滅してしまいます。そんなことがおこらないように、植物たちは、⑥ 厳密に夜の長さをはかり、ツボミをつくるタイミングをはかっているのです。そんなしくみを身につけて、自然の中を生き抜^ぬいている植物たちのあっぱれな生き方に感服せざるを得ません。

(田中修『植物のあっぱれな生き方』)

問二 — 線部①「アサガオ」の咲く時期はいつですか。本文中から十字でぬき出して答えなさい。

問三 — 線部②「ところが、芽がツボミになると」とありますが、その後アサガオはどのようなになりますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ツルが伸びず、小さい植物のまま、少しの個数のタネしか残せない。

イ ツルは伸び、大きく成長して、少しの個数のタネしか残せない。

ウ ツルは伸びず、小さい植物のまま、多くの個数のタネを残せる。

エ ツルは伸び、大きく成長して、多くの個数のタネを残せる。

問四 — 線部③「春に花を咲かせる植物」とありますが、春に花を咲かせる植物を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア キキョウ イ オミナエシ ウ ナノハナ エ ハギ

問五 — 線部④「伸びた茎の先端に花を咲かせるため」とありますが、どうして伸びた茎の先端に花を咲かせなければならないのですか。本文中の言葉を使って、解答欄に合うように九字で答えなさい。

九字 ため。

問六 — 線部⑤「植物たちは、厳密に夜の長さをはかり、ツボミをつくるタイミングをはかっている」とありますが、そうしないと、最悪の場合にはどうなりますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 成長できない イ 絶滅する ウ タネを残せない エ 不利益をこうむる

問七 — 線部⑥「植物たちのあっぱれな生き方」とありますが、植物のあっぱれな生き方を可能にしているのは、植物に何があるからですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 身につけてきた知識

イ 身につけてきた知恵

ウ 身につけてきた恩恵

エ 身につけてきた仲間

【三】の問題は、次のページにあります。

【三】 次の文章を読んで、下の①～⑩の意味にあてはまる語句を指定した字数にしたがって本文中からぬき出して答えなさい。
 (意味は、『広辞苑』あるいは『明鏡』に記されているものです。)

長崎港から南西へ19キロ。「端島」は横殴りの雨に打たれ、写真で見る以上に荒涼としていた。周囲を覆うコンクリートの護岸、崩れかけたビル群。そこには灰色の世界ばかりが広がっていた▼通称・軍艦島。「明治日本の産業革命遺産」の一つとして先に世界遺産に登録され、いま大人気の観光地である。長崎市内で5社が運航する上陸観光船の一つで訪ねてみた▼南北約480メートル、東西約160メートル。一番の魅力は通称通り、軍艦に似たその外観にある。だがそれ以上に、海底炭鉱の島として刻んだ80年余りの歴史にこそ興味が尽きない▼小さな岩礁に鉱脈が見つかり三菱合資会社の経営で本格的な採炭が始まったのが1891年。操業は不眠不休。1974年に閉山するまで日本の発展を支える最前線の島だった▼高度経済成長期に入った60年前後の島民は、なんと約5300人。世界一の密度ともいわれた過剰な

① (二字)	カメラでフィルムに写した像を印画紙などに焼き付けて映像にすること。
② (二字)	水害を防ぐため、河岸や海岸を堤防・コンクリートブロックなどで保護すること。
③ (二字)	他の国や地方を訪れて風景・風物・史跡などを見て歩くこと。
④ (二字)	船や飛行機を一定の航路で進ませること。
⑤ (二字)	おもしろいと思って、心がひかれること。
⑥ (三字)	仕事などで、最も激しい競争や活動が繰り広げられているところ。
⑦ (二字)	ある量が一定の面積・体積などの中に含まれる割合。

人口を収容するため、鉄筋コンクリート造の高層集合住宅が次々に建てられていった▼最新設備の病院ができ、幼稚園はビルの屋上に設けられた。家電が一般家庭に普及したのは大都市より早かった。ないものは樹木の緑だけ。最先端は、この極小の島に詰まっていた▼閉鉱とともに無人化して41年がたつ。海底1千メートルまで延びた坑道もビル群も廃墟と化し、ただ灯台だけが生あるもののように夜の海を照らす。

(福井新聞「越山若水」二〇一五年七月二十四日)

- ⑨ 岩礁 — 海中にかくれている大きな岩。
 操業 — 機械などを動かして作業すること。
 坑道 — 炭鉱や鉱山の坑内につくった通路。
 廃墟 — 建物・市街などの荒れ果てた跡。

⑧ (二字)	人や物を一定の場所や施設におさめ入れること。
⑨ (二字)	テレビ・洗濯機・冷蔵庫など、家庭で使う電気器具。
⑩ (二字)	岬・島・港口などに設置する塔状の航路標識。

